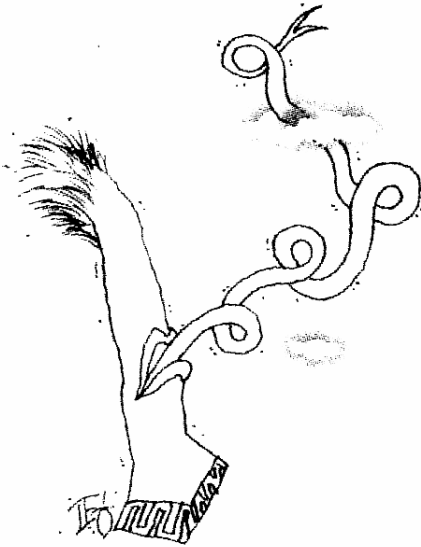


バベルの塔を崩す

第2編第5章

自由意志の弁護のために持ち出されるのをつねとする反論を論駁する



聖書は救われた人について語るときいつも半分だけ生きた者ではなく、完全に死んでいる者を生かす(エフェソ 2:5)と語っています。このように人間の自由意志は徹底して腐敗していて、私たちの呼吸から出てくるものは悪臭だけなのです。ときには善良そうな姿を垣間見せるときもありますが、その知性は偽善と悪意で包み込まれており、心情の内側には醜悪さが満ちています。

バベルの塔を建てた人間の愚かさは続けて繰り返されています。バベルの塔は人間の自己過信が巻き起こす傲慢によって建てられた塔であったと言えます。「私たち自らが考え、私たち自らが判断し、私たちは自分の力で生きることができる。意味もなく私たちの人生をすべて神に任せることはできない!!」

人間の自由意志が罪の鎖につながれていることについて不満を持つ人たちは多くいます。鎖につながれた人間の自由意志は必然的に自分から罪を犯すことのほかできないという聖書の教えにはとても同意できないと言うのです。そこで彼らはバベルの塔を建てます。しかし神は彼らの建てた傲慢の塔が混乱した虚構にすぎないことを明らかにして下さい。バベルとは「混乱する」という意味を持った言葉です。今回はもう一度神の御言葉によってその混乱した虚構の正体を明らかにすることにしましょう。

第一節 最初の種類の虚構:「常識的に考えてみても自由意志がただ罪の奴隷状態だけにあるとは考えられない」

「もし罪が必然的であれば罪ということはできないし、またもし罪が自発的な意思から起こってくるものだとすればそれを避けることができるのではないか？」昔、ペラギウスもこのような言葉でアウグスチヌスを攻撃しました。しかし、人が必ず罪を犯し、悪しきことのほか決心することができないということは神の創造から出たものではなく、墮落と腐敗からくるものなのです。

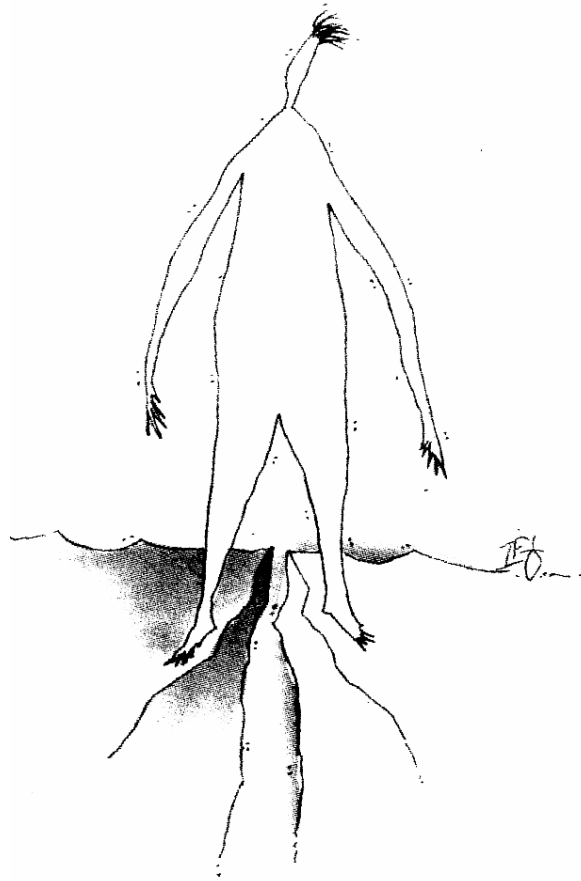
だからこそこの必然性こそが人間が罪に定められていることを最も明白に示すものだとも言えるのです。そして罪の下にある人間はサタンと同じようにあふれ出る悪によって、自分から罪を犯すのです。このために罪を避けることができず、善を選ぶこともできないのです。従って必然的にただ罪だけを犯すこととなります。

「もし罪が必然的ならば賞罰の意味がなくなってしまうのではないか」。これも有名な言いがかりのひとつです。善行でも悪行でも人が自由意志で選ぶことがなければ、人に賞や罰を与えることは意味がなくなってしまうという主張です。しかし、罪を犯すのは人間の自発的な意思から出るので、人間は絶対に罰を受けなければなりません。すべての罪の責任の根拠は腐敗した人間にあるからです。しかし、賞は違います。賞は私たちが自分の力で積んだ功績のために受けるものではありません。罪は私

たちのものですが功績は神のものです。神が恵みを与えてくださらなければ私たちは絶対に功績を積むことはできません（コリント第一 4:7、ローマ 8:30）。功績から恵みが生じるのではなく、恵みから功績が生まれるのです。しかし、神は私たちに功績を積むことができるように恵みを与えて、その功績に賞を与えてくださるのです。

「もし罪が必然的ならば善悪の区別が消えうせてしまうのではないか」。もし私たちの意志が善を選ぶ能力を持っていないならば、いずれにしても同じ本性を持っている私たちはすべて悪だけを行うようになるのですから善悪の区別がなくなってしまうのではないかという主張です。しかし、すべての人がみな悪を行うわけではありません。本来の人間はみな悪であしかありませんが、ある人たちはその悪から癒されると言えるのです。誰がそのような幸福を受けることができるのでしょうか？神がそのようにされることを求められた人々だけその幸福を受けることができます。だから善と悪は昼と夜のように明らかに区別されるのです。

「もし罪が必然的ならばすべての忠告は無駄なものでしかない」。本当にそのように言えるのでしょうか？昔、アウグスチヌスがこのような反論を受けたとき、彼は「叱責と恩寵について」(On Rebuke and Grace) という題の文章の中でこのように語っています。「おお、人よ。教えを聞いたなら、その通りにしなければならぬことを悟りなさい。叱責を受けるなら、その様な叱責を受けられないことこそ罰であることを悟りなさい。そして祈った答えを受けたいのなら、それをどこで受けることができるかを悟りなさい」。



また「霊と文字について」(On the Spirit and the Letter) という文章では「神は人の力を基準にして律法の教えを与えられたのではない。さらに命令を与えられる神はまたすべての選ばれた者たちにそれを守り行うことができる力を十分に与えられる」と語っています。

パウロはコリントの教会の信徒に愛を行いなさいとどんなに厳肅に命令したでしょうか？しかし、彼は明らかに「これは、人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるものです」(ローマ 9:16)と語っています(参照、ヨハネ 15:5;コリント第一 3:7;イザヤ 5:24 ;ダニエル 9:11;申命 10:6;エレミヤ 31:33;エゼキエル 36:26)。聖書には罪人に向けられた神の忠告が豊かに登場します。それは聞いて悟ることが可能だからです。もちろん悟る力とその教えを選択して行うことができる力はただ神からだけ来るのです。

不敬虔な者たちは神の忠告を聞いて良心を刺され、心に責めを感じます。もちろんそのようななくても彼らは忠告を拒絶するのです。しかし、その忠告は彼らの懲らしめとなり、裁きとなり、最後の日に神の裁きの座の前で彼らを言い逃れのできないように罪に定めることとなるのです。しかし、敬虔な者たちには御言葉の忠告は聖霊が用いる剣となります。聖霊が信者の内で恵みによって働き、忠告を私たちに効果的な道具としてくださるのである。

神は選ばれた者たち内で二つの方法で働かれます。内面的には聖霊を通して、そして外面的には御言葉を通してです。聖霊は御言葉の忠告を用いて選ばれた者たちの内に善を行おうとする願いを起こさせ、そして怠慢を取り去って、罪悪の甘き欲望を取り去ると同時に罪を憎む力をも起こさせるのです。このように神の忠告と教えは遺棄された者にも選ばれた者にもすべて有益に使われるのです(コリント第二 2:15,16)。

第2節 第二の種類 of 虚構:「聖書にある律法と約束と叱責を見ても自由意志が罪の奴隷状態にだけあるとは言えない」

「神が私たちに教えを与えてくださったのは私たちに当然それを選び、守ることができる能力があるためだ。本当にそうでしょうか？もし、守ることができない教えを与えられたとしたら、神は私たちをもてあそばれているのでしょうか。そうでないとすれば私たちはそれを守ることができるのではないのでしょうか？しかし、神が私たちに律法を与えられたのは私たちの無能力と罪をさらに明らかにするためなのです(ガラテヤ 3:19,22;ローマ 3:20,5:20,7:7,8)。ですから神は私たちが行うことができないことを命令され、私たちが何を神に求めるべきなのかを教えてください(アウグスチヌス)。

律法は神の恵みがなければ私たち人間には何もすることができないことを認めさせるようにさせるのです。ですから、律法の教えは次のような三つの種類で区分して説明することができます。第一に「神に立ち返れ」と言う命令です(ヨエル 2:21;ホセア 14:2,3)。しかし、神が立ち返らせてくださなければ誰も神に立ち返ることはできません(エレミヤ 31:18,19;申命 30:6;エゼキエル 11:19,36:26)。悔い改めは神と人の共同作業ではありません(使徒 11:18、ゼカリヤ 12:10)。

第二は「神を敬え、彼の戒めを守れ」ということです。これも全的に神の恵みです(ガラテヤ 5:22-26;ヨハネ 15:5)。そして第三は「神の恵みの中に留まり続けなさい」ということです(使徒 13:43)。しかし、恵みの中に留まり続けることができる力もただ神の恵みによるのです(エフェソ 6:10,4:30;テサロニケ第二 1:11;コリント第二 8:16,17)。

「神が私たちに約束してくださったことと私を叱責されことを見れば、私たちの意思に自由が

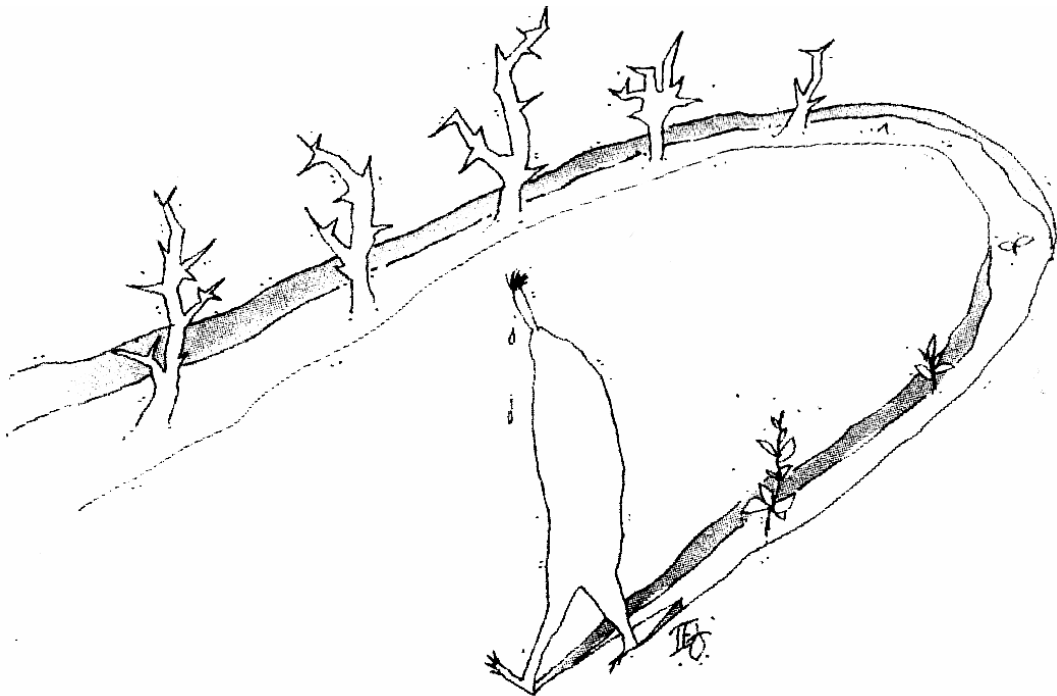
あるということを証言しているということが分かる。確かに聖書を見るとたくさんの約束が間違いなく私たちが自分の心でそれらを自由に選択できるように表現されています(アモス 5:14; イザヤ 1:19,20)。しかし既に十分に明らかにしたように神の約束は神がそのように恵みを施してくださいという約束でもあるのです。ですから不信者にはそれが罪に定めることと裁きの根拠となり、信者には悔い改めと励ましと心を奮い起こさせる聖霊の有効な助けとなるのです。

第3節 第三の虚構:「聖書の特別な何節かの箇所を見ても自由意志が罪の奴隷の状態にだけあるということは言えない」

申命記 30 章 11 - 14 節では「わたしが今日あなたに命じるこの戒めは...それを行うことができる」と語られています。しかし、この御言葉はすでに愛の約束が含まれていて、それ自身が福音なのです。「あなたたち自らの力でその命令を行えというのではなく、その命令を行うことができる恵みを与える」ということなのです。すぐ前の 6 節の箇所で神は命令を行うことができるように心に割礼を授けて下さると約束されています(比較、ヨハネ 1:12,13)。

また、自由意志弁護論者たちは、もし罪悪が私たちのものならば善行も私たちのものにならなければおかしいと主張します。彼らは人間の自由意志では罪のほかに犯すことができないという言葉を見ると気分を悪くするからです。しかし、善行は私たちのものであると同時に神のものであるのです。私たちは毎日、主の祈りにあるように日ごとの糧を神に求めます。それならば、日ごとの糧は誰のものでしょうか? 神が与えられたのですから神のものであると言えますし、同時に私たちに与えられたものですから私たちのものでもあると言えるのです。このような意味で言えば善行も私たちのものと言えるでしょう。

「決心することは本性に属し、正しく決心することは恵みに属する」というアウグスチヌスの言葉は全く正しいものです。だから神の恵みは私たちの意志を破棄するのではなく再建することに



なります。整理してみるとこうなります。第一に神が愛において私たちの内で働いてくださることはみな私たちのものでもあると言えるのです。もちろんそれは私たちがしたことではない点を認めなければなりません。第二に、神が善を行うように私たちの心を導かれる、そのときの心も私たちのものであり、意志も私たちのもの、努力も私たちのものであると言えます。

自由意志弁護論者は続けてローマの信徒への手紙 9 章 16 節、コリント第一 3 章 9 節、ルカによる福音書 10 章 30 節などをあげて私たちの自由意志がある程度は活動していて、半分は生きているのではないかと言う虚構を語ります。しかし、ローマ信徒への手紙の 9 章 16 節が教えることは明らかです。私たちのために救いの道を開くのは私たちの意志や能力ではなく、神の慈しみだけによるのです。そしてルカによる福音書 10 章 30 節についての彼らの主張は行き過ぎた拡大解釈しかなく、またそのようなわずかな箇所を教理の完全な土台としようとするれば大きな過ちを犯す原因になってしまいます。しかし、そのようにしてはいけません。

聖書は救われた人について語るときいつも半分だけ生きた者ではなく、完全に死んでいる者を生かす（エフェソ 2:5）と語っています。このように人間の自由意志は徹底して腐敗していて、私たちの呼吸から出てくるものは悪臭だけなのです。ときには善良そうな姿を垣間見せるときもありますが、その知性は偽善と悪意で包み込まれており、心情の内側には醜悪さが満ちています。

結びの言葉

聖霊が御言葉によって私たちの内で働かれることは四つです。第一に悔い改めさせること。第二に従順にさせられること。第三に、常に恵みの中に留まらせること。そして第四に、何を祈ればよいかを教えてください。このような聖霊の恵みがなければ私たちは必然的に罪だけを犯して、死ぬほかありません。「だから今私たちに必要なものは弁護士ではなく医師である」のです（カルヴァン）。